

1920年代中国新詩における日本近代詩歌の受容

——周作人と馮乃超の場合（要旨）——

佐 藤 普美子

20世紀初頭、周作人（1885-1967）は日本に留学し、馮乃超（1901-1983）は日本に生まれた。彼らは中国の五四新文学運動に大きな貢献を果たしたが、その文学観は日本近代詩歌から多くの啓発を受けている。その後、周作人は文化上の親日と政治上の反日の間で苦しみながらも日本文学を愛し続け、馮乃超は一時期傾倒した日本近代詩の影響を脱して左翼文芸への道を歩む。

本論は、周作人と馮乃超という日本と関わりの深い二人の文学者を取り上げ、1920年代に彼らが日本近代詩歌から何を学ぼうとしたのか、その背景には自国の文化や文学に対するどのような焦慮と期待があったのかを考察する。

一．周作人の詩歌観

周作人は、胡適らの言文一致論に発した文学革命運動に呼応するかたちで、清新な個人主義とヒューマニズムの理想を掲げ、魯迅と共に中国新文学の形成に重要な役割を果たした。当時、彼は与謝野晶子の評論を女性解放の視点から紹介して婦人問題論争に先鞭を着け、また有島武郎ら白樺派の文学に共感し、「新しき村」運動に関心を示すなど、同時代の日本文学を自国の思想・文化啓蒙運動にとって重要な資源の一つとみなしていた。

また1920年代前半に日本の詩歌の翻訳や紹介を集中的に行っている。彼自身はすでに「新体詩上はじめての傑作」と称賛された散文詩「小河」を発表、新

体詩集も刊行したが、30年代以降新体詩はあまり作らず、「打油詩」とよばれる諧謔的な旧体詩を多く作るようになる。結局、新体だろうが旧体だろうが「詩」であればよい、というのが彼の主張であるが、旧体詩の問題点については鋭く指摘し、当時の国学運動が推戴する旧体詩が、形骸化した因襲的文化として生活の中に深く根をおろし、人間性や自然の情感の発露を損なっていることを憤り嘆いている。周作人の詩歌に関する議論は、基本的に五四新文学運動の文脈の中で、因襲的文化を徹底的に批判する態度に貫かれている。

一方で、彼は「醜い字句」「小詩を論ず」等一連の評論を通し、「詩語」を擁する閉鎖的な旧体詩のパラダイムを批判すると同時に、新体詩の理想として積極的に日本の短詩型文学を紹介した。小詩は「簡明で含蓄に富む」点で「真実の感情」「切実な思い」と結びつきやすく、また「刹那の内面生活」には「わざとらしさ」が入り込みにくいため、「日本の歌はまことに理想の小詩である」と称賛している。それらの評論では石川啄木の詩論「歌のいろいろ」の中の「斯くあるべきものといふ保守的な概念」に対置される「鋭い実感」という語がたびたび引用されている。実感に支えられた「真実」「簡明」こそ当時周作人の考える「文学」の実質であり、ひろく五四時期のまことの人間の文学を求める文学者たちに共通した、虚偽虚飾へのアンチテーゼであった。

周作人は草創期新体詩の理念において、主に日本詩歌の翻訳紹介を通して、「真実にして簡明」とみなす「詩」の理想を精力的に示していったのである。

二. 〈実感〉の表現

丸山真男は『日本の思想』の中で、いわゆる実感信仰の問題を指摘している。日本近代文学は「いえ」的同化と「官僚的機構化」という日本の「近代」を推進した二つの巨大な力に挟まれながら自我のリアリティを懸命に模索することから出発したため、制度に対する反発は抽象性と概念性への生理的嫌悪と結びつき、合理的（法則的）思考への反発を「伝統化」してしまったこと、文学的実感とは狭い日常的感觉の世界か、瞬時にきらめく真実をつかむ直観でしか捉えられないという日本近代文学の傾向を指摘した。

ところが、文言と白話の隔絶がより著しい中国においては、そもそも実感を

表現する文学言語の創造が困難を極めた。胡適、周作人らが追求した五四時期の文学革命、言文一致の理想はまずは論理的思考より、率直な心情表現に求められたといえる。

鶴見祐輔は1910年代後半、北京の周作人を訪れた時、周が日本の小説を翻訳するのに「従来の支那文字ではどうも感じがしっくり出ない」とこぼし、西洋文芸の影響を受けた日本文は現代人の心持にしっくり合うが、支那文字では、まだそこまでいかない」と言うのを聞いてひどく驚く。鶴見自身は当時日本語というものを駆使して日本人が果たしてどれだけの思想的水準に上り得るか疑問に思っていたため、周作人の発言から「現代の支那語は、それ以上に実生活とかけ離れた不便なものである」ことを知って驚いたと述懐する。周作人は中国の新文学にはまだ実感を表現する言葉がないことを痛感していて、まずは個人の実感や真情を表現する文学言語の創造を急務とみなしたと思われる。

当時の周作人が拘った「実感」とは、創造社が鼓吹するロマン主義と「時代精神」ではなく、あくまで「個人」に根差した、素朴で生々しい感情である。その要件とは切実感、切迫感すなわち焦慮の感覚である。「実感」表現にすぐれる日本の詩歌、ことに石川啄木や与謝野晶子の歌に溢れる斬新で生々しい「実感」表現に周作人はとりわけ愛着と共感を抱いた。文学が個人を本位とする以上、「個人が感じる愉悦や苦悶は、純真で切迫したものでありさえすれば普遍的感情である」として、彼は切実な実感の表現こそが「個人」と「普遍」を結びつける鍵とみなしたのである。

三. 「象徴主義」から「革命文学」へ向かったヴェール詩人馮乃超

馮乃超は華僑の子として横浜に生まれ、幼年期から日本で教育をうけ、八高理科、京都帝大哲学科を経て、1925年東京帝大文学部社会学科に転入学した。後期創造社の主要メンバーの一人として『創造月刊』に多くの象徴主義的詩歌を発表し、その詩は「雲煙が立ち込める」イメージを多用して独特の朦朧とした境界を作り出したことから「ヴェール詩人」と称された。しかし象徴派詩人馮乃超は1927年から28年の間にマルクス主義に接近、左翼文芸の理論家に変貌し、文学史的には創造社の「左旋回」と位置づけられた。彼は当時の多くの文

学青年と同様、1920年代後半の中国国内の情勢を深刻に憂慮し、その危機感が彼の文学思想に大きな転変をもたらしたことは間違いない。

1920年代中国の象徴詩派はボードレールらフランス象徴主義の影響を受けたとされるが、馮乃超はむしろ日本象徴主義の影響が大きい。彼が心酔した三木露風は北原白秋と共に日本の大正期詩壇を風靡した象徴主義の代表的詩人で、その詩は暗示の手法を多用して悲哀や憂いの情緒と神秘的な雰囲気醸成した。しかし日本象徴主義は、批評精神を内在させたフランス象徴主義とはほぼ無縁で、むしろ保守的な伝統主義に近いものであり、フランス象徴主義の表面的な退廃や神秘の情緒を日本の伝統的な美意識である「幽玄」に重ねたものと評される。

馮乃超の象徴主義詩歌はリズム感と色彩感に富む言葉を用いて、悲哀、憂い、退廃の情緒を暗示的に表現したもので、これは馮自身の当時の生活と現実とに抱く感覚と無縁ではない。

一般的に五四時期の新詩の多くは抽象的、概念化の傾向を持ち、読者の五感に訴える力には欠けていた。このため、暗示と感覚を重んじる彼の詩は新詩言語の創出に一定の役割を果たした。イメージの濫用はしばしば印象の散漫化を招いたが、その傾向もしだいに変化し、たとえば「残燭」では飛蛾（灯蛾）のイメージを通して、一回性の生存の意義を強調する硬質な抒情表現に成功している。馮乃超はしだいに日本象徴主義の、ただ朦朧とした退廃の気分を表現する作風に飽き足りなくなり、新たな審美意識と批評精神によって、人間心理を観察分析する「感情を体系化」する方向に駆り立てられていったといえる。

四. むすびに

周作人は実感の表現にすぐれた日本の詩歌の中に、自国の文学に欠けているものを見出した。それは詩体の新旧に関わらず、個人の内心の真実から発し、簡潔明瞭な言葉に現れる精神である。彼は文学創作における真心のない仰仰しさ、わざとらしい不自然さを憎んだ。切実な実感の表現こそが周作人が当時、日本のすぐれた近代詩歌から学んだものだったといえる。日本近代文学のいわゆる「実感信仰」の問題が、20年代の中国新文学、特に新体詩には逆に啓発と

なったことはなかなか興味深い。周作人の日中両文化への深い洞察と日本文学への共感、その後の両国間の戦争の中で、彼の歩みと立場をひときわ悲劇的で複雑にすることになった。

一方、馮乃超ははじめ三木露風の日本象徴主義の物憂く悲しげな雰囲気の影響に陶酔した。おそらくその情調は当時の馮自身の内心生活と響きあうものであり、彼の象徴詩は中国草創期の新体詩が欠いていた（あるいは軽んじた）時代の「雰囲気」や「気分」「感覚」を映し出すものとなった。しかし、しだいに馮乃超はその曖昧な気分の表現ではもはやリアルな焦慮を表現できないことに限界を覚え、むしろ「感情を体系化」する必要を感じ、作品にメッセージを明確にうち出す革命文学への道を歩むことになる。

二人の文学者は自国の新しい文学の表現に欠けているものを日本近代詩歌の中に新鮮な資源として見出し、周作人は変わることなく「実感」と理性に裏打ちされた簡素で自然な表現を尊び、同時に多種多様な大量のエッセイによって中国固有の文化の再生を構想する独自の道を歩んだ。一方、若い馮乃超の方は曖昧な「気分」の表現とは決別し、自国の同時代文学の急務とみなした左翼文芸への路を選びとっていった。20世紀の初め、激動の時代に身を置いた誠実な二人の文学者はともに「焦慮」の念を抱き、それぞれの文学表現を模索し、それぞれの人生を歩んでいった。この二人の探索の方向とたどった運命は全く異なる。しかし、深い焦燥と危機感を抱きつつ、外国文学と自国の文学を対照させながら、固有の文化を模索した精神においては共通のものがあったといえる。また20世紀中国の新文学と日本近代文学がいかに関わりあったかという問題は、今後さらなる研究が俟たれる興味深いテーマである。